

映画『バナナの逆襲』上映
+「日本に届くバナナの今」
を知るスペシャルトーク



バナナについて思いを巡らす夜に。

暑い夏の夜の日に、バナナについて考えるイベントを開催しました。映画『バナナの逆襲』の舞台は中米ニカラグアのバナナプランテーション。使用禁止になった農業を使い続けた巨大企業ドール・フード社と12人のバナナ労働者の訴訟を巡るストーリー。食糧生産の闇やグローバル企業の実態が暴かれる内容です。

一方、日本に輸入されるバナナの約8割はフィリピン産。その生産実態や構造はニカラグアと共通することもあります。フィリピンのバナナプランテーションについて、2015年から調査をしているイェール大学博士課程のアリッサさんのトークでは、日本マーケット特有の高地栽培バナナの話や、プランテーションで使われている農業が特定しにくい問題、その影響によって現場で何が起きているのかなど、当事者目線での話がありました。

カフェスロー特製のバラゴンバナナのメニューも準備され、頭もお腹も満たされて、改めてバナナについて思いを巡らす夜となりました。



吉澤真満子(よしざわ・まみこ/APLA) バナナの逆襲 いいね! してね。



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
バラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物との取引で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F 過去のPtoP NEWSはこちらから
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp 特定非営利活動法人APLA



ここが知りたい!

バナナ

昨年 日本では、新パナマ病というバナナの病気の被害が数多く報道され、「バナナが食卓から消える!?!」というニュースをよく目にしました。普段、バナナの病害について聞くことがない日本人にとっては、驚きのニュースだったと思いますが、バナナ業界は常に病害と闘ってきました。

種のないバナナは、株分けで栽培するため、同じ品種のバナナは同じ遺伝子を持っています。そのため、病気への耐性がつきにくく、伝染病が流行ると簡単には止めることができません。実際、1960年代、中米のパナマ周辺で発生したパナマ病により、当時一般的に流通していたグロスミッシュという品種のバナナが大打撃を受けました。パナマ病は、カビの一種であるフザリウムによって引き起こされ、感染したバナナは枯れてしまいます。

その後、パナマ病に強い品種として開発されたのが、現在流通しているキャンディッシュです。

しかし、1990年代になるとキャンディッシュにも感染する新パナマ病が台湾で発見されました。現在、新パナマ病に耐性のあるバナナ品種の開発が進んでいるとも聞きますが、種の無いバナナの品種開発には時間がかかります。キャンディッシュに代わる新たな品種が店頭に並ぶ、そんな時代が来るかもしれません。

黒岩竜太(くろいわ・りゅうた/ATJ)

人から人へ
PtoP
ピープル NEWS vol.19
2017.10
PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

池の丸干し



産地の暮らしを垣間見る
1枚の写真から

カラバオに乗った少女
from フィリピン

ラ・カステリアーナのサトウキビ畑を散歩していると、地平線まで続くサトウキビ畑の向こうに、小さな影が見えてきました。だんだんと近づいてくると、カラバオ(水牛)に乗った少女でした。サトウキビ畑に吹く風を切りながら、噴煙を上げるカンラオン山を背景に、音もなく目の前を通り過ぎて行く姿はまるで夢の中の光景の様でした。カラバオの歩みは意外に早足で、我にかえり後を追いかけてシャッターを切りましたが、あっという間にサトウキビ畑の彼方に消えて行きました。

義村浩司(よしもら・ひろし/ATJ)

特集



池の丸干し

from インドネシア

井の頭池の「かいぼり」にインドネシアへの思いを馳せる

ナウなヤングのデートのメッカ、東京は吉祥寺にある井の頭公園は、今年めでたく開園100周年を迎えました。井の頭公園の見どころと言えば、神田川の出発点でもある井の頭池。カップルでボートに乗ると必ず別れると噂されるこの池は、それでも休日には所狭しと人工スワンが行き交い、天然カモはのびやかに泳ぎ回り、春には桜の花びらが色を添えます。

そんな井の頭池、かつては水が透き通っており、池底まで見えるほどだったそうです。しかし高度経済成長のあおりを受けて湧水量が減少。その結果、池水の滞留時間が長くなったことで植物プランクトンが増加し、池の水は濁り、在来生物は減少し、外来生物が幅を利かせるようになってしまいました。そこで、100周年を迎えるにあたり、地元の人びとが「井の頭池をよみがえらせよう！」と立ち上がり、始まったのが「かいぼり」でした。

2014年から、数回に分けて行われたこの「かい

ぼり」。簡単に言えば、池の水を抜いて池底の土を天日干しすることと、そこにいる生き物を捕まえて仕分けし在来種だけを池に戻す、という取り組みです。それにより、土の地力が回復して水草が育ち、そこに在来種を戻すことで、本来の生態系に近づけていくことができるのです。もう誰も自転車を捨てたりしなくなるのです。

しかし、エコシュリンプを知る人にとっては、井の頭池は、エビの養殖池にしか見えません。目を閉じると、そこには平米当たり3尾の割合で放流された稚エビとバンデンが、仲良く泳ぎ回っています。薄目を開けると、井の頭弁財天は養殖池にある管理人の小屋に見えてきます。思わずパンツ一丁でエビを獲りに入水したくなりますが、実際に入ってみると、池底はそれほど柔らかくはなく、エビもいませんでした。水も、インドネシアよりは冷たいです。その後は厳しい現実が待っています。



かいぼり中の井の頭池

エコシュリンプの養殖池でも「かいぼり」

さて、インドネシアに広がる粗放養殖池には、ナウなヤングも人工スワンもいませんが、大人の階段を上るエビと魚はたくさんいます。そして、古いところでは、めでたく300周年あたりを迎えているはずです。乾季になると、「かいぼり」と同じように水を抜き、残ったエビや魚を獲り、池の底を天日にさらします。ヒトは吉祥寺でもジャワ島でも、同じようなことをして生きています。

水を抜いた養殖池は、赤道直下のガンガンの日照りにさらされ、池底の粘土質土壌は煉瓦のようにカチカチになります。布団干しと同じで、これにより土が紫外線殺菌されるそうです。このカチカチ状態で1ヶ月くらい放置し、完膚なきまでに乾燥させるのが、本当の池干しのようです。その間に、池の土をひっくり返すこともあります。炎天下、数ヘクタールの池でこの作業をするのは、非常な重労働です。



池干し前の養殖池

地球の変化は養殖池にも

なぜエビ養殖のために土を大切にするのか? もちろん環境を整えるためなのですが、特に重要なのは、水草の生育です。土づくりがうまくいかないと、いざ養殖を始めた時に水草が良く育ちません。すると、プランクトンの発生が少なくなり、稚エビが食べるエサが少なくなることになり、結果的にエビの生育が悪くなります。さらに、日中の光合成が減るために水中の酸素が不十分になったり、水面を覆う部分が少なくなることで昼夜の水温変化が激しくなったりと、見えないところでもエビの生育に影響を与えるそうです。もちろん、水草が多ければいいというものでもなく、適切な割合が望ましいです。生産者に聞くと、「水面の40%を覆うくらいがいい」など、色々な意見を聞きますが、あまり共通見解はありません。各々の信念に基づいてい

る部分もあるようです。

このようにエビの粗放養殖にとって重要な池干しですが、自然に依拠した養殖方法ゆえに、お天道様には逆らえません。最近では地球温暖化の影響か、乾季と雨季の境目がはっきりせず、本来の乾季にも雨が降り続き、満足な「干し」ができないのです。これがエビの生存率を悪化させている、と言う生産者もいます。昔から続く養殖方法に影響を与えるほどの環境変化は、決して小さくはなく、養殖池の池干し一つとってみても、実は地球はつながっているということを感じないわけにはいきません。日々の生活をちょっとでも見直すきっかけになれば、と思います。

若井俊宏(わかい・としひろ/ATJ)

エビ養殖のためにかかせない
水草の生育



エコシュリンプの詳細はオルター・トレード・ジャパンのサイトへ

<http://altertrade.jp/ecoshrimp>